

B-TACE直後単純CTとCone-Beam CTによるPixel値による仮想CT値の相関性を検討した。

【方法】2013年12月から2014年11月までにMiriplatinによるB-TACEを施行した腫瘍径5cm未満肝細胞癌82結節を対象とし、B-TACE直後の単純CTとCone-Beam CTにおいて、Lipiodol集積部に関心領域(ROI)を設定し、単純CTのCT値とCone-Beam CTにおけるPixel値を測定した。

【成績】結節上に設定したROIの平均CT値は、単純CTで 438.68 ± 279.02 、Cone-Beam CT Pixel値は 416.07 ± 311.09 であった。

左葉結節では相関係数は0.891、右葉結節では相関係数は0.926であった。

【結論】Miriplatin B-TACEにおいて、Lipiodol集積は治療直後の単純CT値とCone-Beam CTのPixel値は相関がある。単純CTのかわりに、Cone-Beam CTのPixel値を用いて、B-TACE中にLipiodol集積を定量的にモニタリングできる可能性が示唆された。

26 球状塞栓物質による肝動脈塞栓療法後に切除した肝細胞癌の1例

大崎 暁彦・和栗 暢生・小川 雅裕
五十嵐俊三・佐藤 宗広・相場 恒男
米山 靖・古川 浩一・五十嵐健太郎
橋立 英樹*

新潟市市民病院消化器内科
同 病理診断科*

2014年1月に3種類の球状塞栓物質が保険収載され、当院では2014年3月よりHepaSphere、Embosphereの使用を開始している。今回、我々はEmbosphereによるbland-TAE後に肝切除が行われ、塞栓物質を組織学的に確認できた肝細胞癌の1例を経験したので報告する。症例は75歳、男性、既往歴は高血圧、糖尿病、心房細動。肝機能障害を指摘され、2014年7月にCTを行ったところS8に7cm、S7に9cmの巨大腫瘍が指摘された。8月に当科紹介受診となった。精査の結果、

肝細胞癌と診断、手術の方針となったが、術前破裂予防目的にEmbosphereによるbland-TAEを行った。その後、肝右葉切除が行われ、S8腫瘍は高分化型肝細胞癌、S7腫瘍は中分化型肝細胞癌であった。切除標本では両病変とも9割以上壊死しており、強い壊死効果を認めた。また動脈内に塞栓物質を確認でき、永久塞栓物質であることを再確認できた。高分化型肝細胞癌の病変は、残存肝細胞癌の一部に肉腫様変化を認め、その変化の移行部も確認された。肉腫様変化は、薬物を含侵させない球状塞栓物質でも起こり得ることが示唆され、今後も症例の蓄積と慎重な治療選択が必要と考えられた。

27 上肢からのアプローチによる腹部血管造影法の有用性の検討

渡辺 庄治・後藤 諒・中野応央樹
保坂 和徳・堂森 浩二・岡 宏充
佐藤 明人・福原 康夫・佐藤 知巳
富所 隆・吉川 明

長岡中央総合病院消化器病センター
内科

腹部血管造影検査において患者の不満が最も多いのは、検査中および検査後の下肢を伸展した状態での長時間の可動制限である。近年、冠動脈造影では上腕動脈、橈骨動脈よりカテーテルを挿入する検査法が開発され、この問題点は解決されつつある。しかし、腹部血管造影では大腿動脈からの血管造影法(transfemoral angiography, TFA)を行っている施設がほとんどである。われわれは2001年8月より橈骨動脈からの血管造影法(trans-radial angiography, TRA)を第一選択とする腹部血管造影を導入し、良好な結果を得ている。本法は患者の負担を軽減させ、腹部血管造影領域においても、今後有用な検査法と考えられたので報告する。